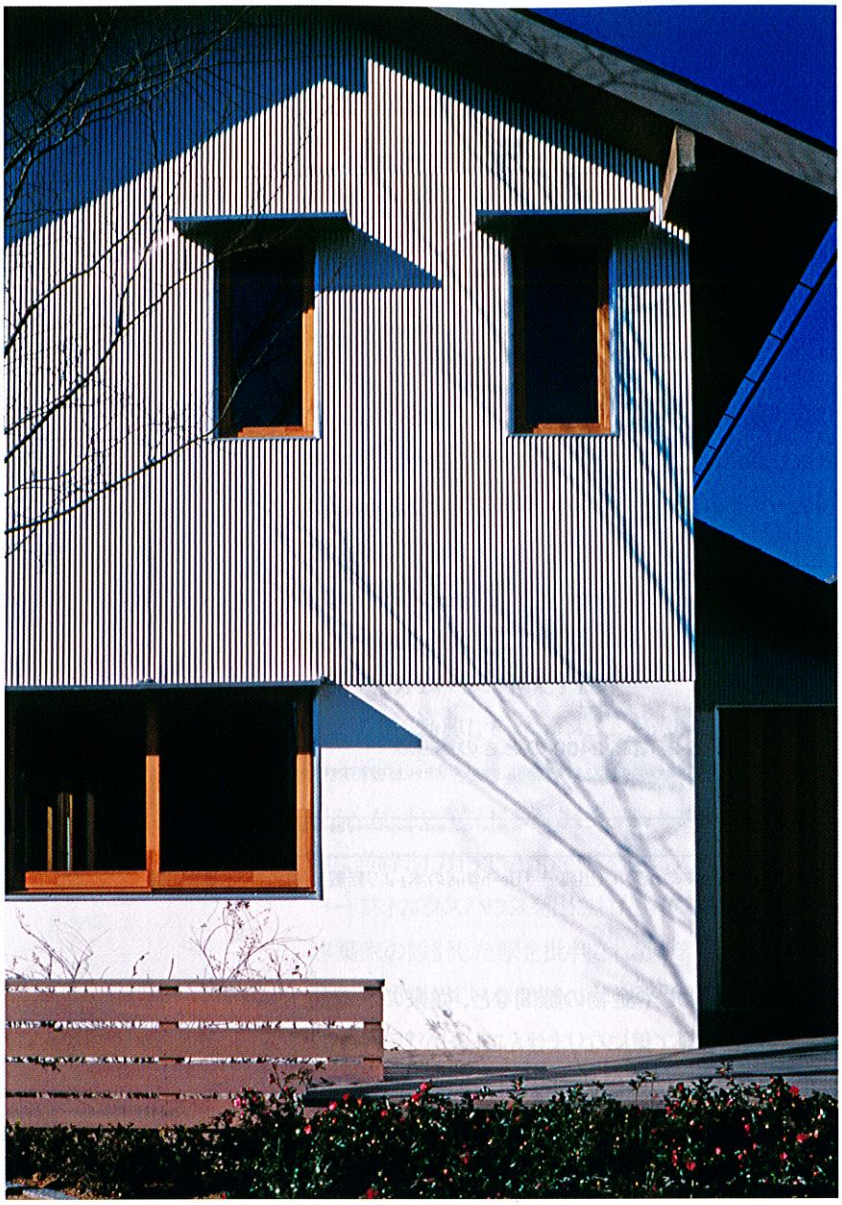

写真1　フォルクスハウス（撮影…北田英治）。外壁上部はガルバリウム鋼板小波、下部は窯業系サイディングリシンかきおとし

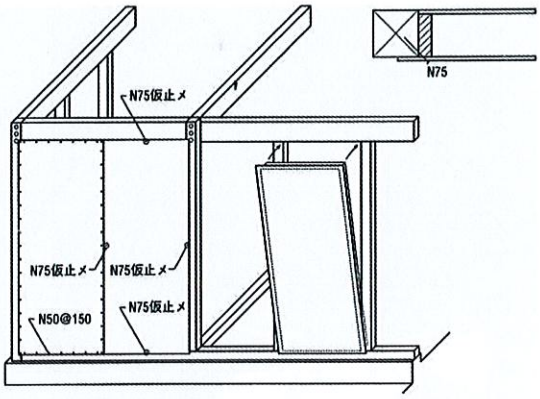

図2　フォルクスハウスの納まり。「ザ 在来」を踏襲し、パネル外側の合板が耳付き断熱材のように飛び出しており、これを軸組材に取り付ける（出典…『住宅建築』別冊45より転載）

つくるタツミの工場でつくり、OMソーラーでフォルクスハウスをつくる体制が整いました。フォルクスハウスそのものでなくても、その延長でやっている工務店は鹿児島のシンケンや甲府の小澤建築工房をはじめ各地にいますね。

フォルクスハウス［写真1、図2］はOMソーラー加盟工務店のためのもので、当時100社くらいが手をあげて、3,000棟くらい建ちました。技術的には難しくないですし、OMソーラーの縛りをなくしたら、もっと広がったかもしれません。フォルクスハウスの初期の頃は、施主が自分の家を「808で」［註2］といった呼び方をするのも流行りました。当時、工務店としてもハウスメーカーにやられっぱなしで、自分たちの何かを持ちたかっただろうと思います。

それからBe-h@us（ビーハウス）［写真2、図3］を始めたのは2000年です。フォルクスハウスが定着しOMソーラー協会の基幹事業になるにつれ、協会から離れて、菅波貞夫と集成材加工とパネル製作を担うタツミとともに新しいブランドをつくろうと考えたわけです。それは一つの事業として（株）ビーファクトリーを設立、後には北海道ビーファクトリーまで設立しました。

「どこでも、だれでも、いつでも」というようなテーマで、柱1本いくらとすべての材料のコストを決めようとしたのですが、工務店は嫌うわけですね。「うちは請負ですからコストを知られるのは困ります」と言われたりしました。ですからセルフビルドのためのBe-h@usにというコンセプトに移行していったのです。それで2007年に、「NPO法人 BE-WORKS」を設立することになりました。

註2　フォルクスハウスでは基本となる平面を20種類程度のBASEプランと呼び、それにGEYAを取り付けることを基本とした。808であれば8m×8mの平面がBASEとなる

着想の元と根源的なもの

――東京藝大で受けた教育の影響はありますか？ 先ほどお名前があがった方や黒川哲郎さんなど、木造建築や住宅に関わる方がある時期まで多いですね。

秋山　片山和俊（本誌編集部会長）、黒川哲郎、永田昌民はみんな1962年入学の12人の一人、同級生でした。吉村順三が建築科主任教授で、山本学治、天野太郎の諸先生がいた時代です。まさしく吉村スクールというべき時代でした。学校時代は生意気でコンセプチュアルな考えで頭いっぱいで、吉村先生のことがよくわかっていなかったのが正直なところです。

しかし、それから四半世紀経って、この木造住宅システムを構築するにあたり、その仕様に吉村が言っていたことすべてを盛り込んでみようと考えたのです。特に、吉村の建築概論の講義は、実に具体的かつ実際的な内容で、それに私は記憶力よく、鮮明に覚えていました。

まず、彼はいつも「シンプルに」と言っていました。それだけでは何も決まりませんが、寸法についての言葉「人間の空間の基本は京間の8畳だね、コルビュジエの書斎もそんなもんだったよ」「屋根と天井の間の空間、その